

事業の名称

麦の穂プロジェクト

地域の教育力向上 自治体等との連携

〔事業責任者〕

(自治体等側)

那珂市教育支援センター センター長 加倉井 正

(大学側)

教育学部学校心理学研究室 准教授 丸山 広人

連携先

- ・那珂市教育委員会
- ・那珂市教育支援センター

プロジェクト参加者

- ・丸山 広人 (茨城大学教育学部, 准教授 : 企画立案, 指導助言, 総括)
- ・加倉井 正 (那珂市教育支援センター, センター長 : 企画, 運営, 全体総括)
- ・打越 由美子 (那珂市教育支援センター, カウンセラー : 会計, 庶務, 研究員)
- ・戸倉 花子 (那珂市教育支援センター, カウンセラー : 研究員)
- ・飛田 三喜子 (那珂市教育支援センター, 相談員 : 研究員)
- ・長津 以子 (那珂市教育支援センター, 相談員 : 研究員)
- ・大久保 れい子 (那珂市教育支援センター, 相談員 : 研究員)
- ・勝山 洋光 (那珂市教育支援センター, 就学担当相談員 : 研究員)
- ・大高 伸一 (那珂市教育委員会, 指導室長 : 企画, 運営, 全体総括)
- ・臼井 英成 (那珂市教育委員会, 指導主事 : 企画補助, 渉外担当)
- ・富山 敦子 (那珂市教育委員会, 指導主事 : 企画補助, 渉外担当)

- ・野村 仁 (那珂市教育委員会, 指導主事 : 企画補助, 渉外担当)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

平成28年3月現在, 那珂市におけるいじめの認知件数は, 累計で小学校320件, 中学校40件, 合計で360件 (内解消は345件, 継続支援15件) となっている。継続支援を要する事案の中には, いじめの重大事態のケースにもあたる, いじめが原因での不登校事案1件が含まれている。また, 解消はしたものの, その後登校しぶりや学校生活の不安感を訴える児童生徒も増加している。主ないじめの内容は友だち関係のトラブルからの「言葉によるいじめ」が9割となっている。

不登校児童生徒の人数は, 平成27年度末で, 小学校で12人, 中学校45名の合計57名である。主な要因は「学校生活への不安」が9割を越える。具体的には小中ともに学校内での人間関係上の悩みをあげる児童生徒が最も多く, 次いで学習上の悩みなどがあげられる。いずれも身近な生活における問題に対して精神的に疲れ, 心が折れている子どもたちの姿がうかがえる。

これらの実態を受け, 那珂市では「折れない心を育てる」プロジェクトを立ち上げた。いじめ, 不登校事案の解消・改善と合わせて, 友だち同士のトラブルや学習上の悩みに打ち当たったときに, へこたれずに立ち向かったり, しなやかに受け流したりする「強い心」「折れない心」を育成するためのプログラムである。45分から50分を一コマ

とした対人関係作りプログラム（レジリエンスプログラム）や学校と家庭が連携して行う、子どもを取り巻く環境改善プログラム（居場所づくりプログラム）などである。いずれも、体験活動を中心とした実践的な即効性のあるプログラムである。他にも、支援を要する児童生徒の保護者向けのプログラムも、合わせて実施した。いずれも、不適応に悩む子どもとその保護者に対して様々なプログラムを提供し、心の安定を図りながら、「折れない心」のもととなる夢や憧れ、自信などの前向きな「思い」の育成を目指すものである。

支援の対象は、市内小中学校においていじめや不登校問題等で不適応状態に陥っている児童生徒、または適応指導教室在籍の児童生徒と、その保護者である。

プログラムの推進に当たっては、大学の専門性を全面に生かしながら、地域のボランティア力などの関係機関のもつ力を連携させ、総合的に推進してきた。

本事業は、改善や解消の有効な方策が見出せないでいるいじめや不登校等現代的課題に対し、いじめに負けない、不登校に陥らない強い心を育てるという、攻めの視点からの新たなアプローチであり、有効な打開策となることが期待できる事業である。

②連携の方法及び具体的な活動計画

ア 連携の方法

大学との連携にあたっては、本事業の前述の通り立ち上げにあたっては、那珂市教育支援センターのスーパーバイザーの丸山准教授が、事業全体の構想から、各活動の企画・運営全般に関わった。また、年間5回、那珂市教育支援センター研修会において、本事業推進について、随時指導助言を行った。

特に、本事業の中心活動の1つである学校支援活動においては、不登校児童生徒への対応として、未然防止や解消・改善に関して有効な手立てや、学校の支援体制づくりについて指導助言を行った。

イ 具体的な活動内容



資料1【プロジェクト構想図】

i 授業プログラム

一単位の授業の中でレジリエンスを高めるためのエクササイズを実施し、自己の有用性や集団への所属感を実感させ、不安や悩みに立ち向かえる心の強さを育成する。

ii 保護者支援活動

不登校、登校しぶりをはじめ、子育てに悩む保護者の思いに寄り添い、同じ悩みを持つ保護者をつなぐネットワークを作り、共感的に子育てと向き合える機会を提供する。

iii 学校支援活動

いじめ問題や不登校といった子どもを取り巻く課題の解消について、学校のニーズに柔軟に対応しながら、個別のケース検討や職員研修といった学校支援を行う。

iv 適応指導教室(ひまわり教室)活動

様々な課題に直面し不安や悩みを抱える児童生徒に対し、個に応じた学習環境の提供や小集団による体験活動などを通して、学校生活へのスムーズな復帰を支援する。

③ 期待される成果

ア 大学がもつ専門的見地からの支援

友だち関係で不安を抱えたり不登校で悩んだりしている児童生徒への対応に当たっては、その心性をよく理解し、配慮を行うことが重要である。そのため、大学がもつ専門的見地

をいかし「強くしなやかで、折れない心」を育成するプログラム開発や有効性の検証を行うことで、目的達成に向けた効果が期待できる。

また、配慮を要する児童生徒の心理特性や過去の体験等に応じた具体的な助言・提案を行う上でも、茨城大学教育学部並びに教育学研究科の学生・院生等による人的支援は大いに有効である。

加えて、保護者に対するカウンセリングにおいても、専門的な見地による支援を通して保護者相互の共通理解を進め、心の安定を図ることで、早期の問題解決への期待が高まる。

イ 行政機関からの支援

本市では、学校不適応の解決や未然防止は喫緊の課題であり、大学からの支援・指導を受けながら、不安や悩みを抱える児童生徒及びその保護者への支援に努めていきたい。

そのため、那珂市教育委員会は、大学を中心とする関係機関の連携体制の確立に努め、その専門性を大いに発揮できるステージの設定並びに整備を全力で担っている。また、種々の教育理論を検証する実践の「場」として、大学の研究に役立てることを期待し、大学と自治体の地域連携モデルを提案した。

4 プロジェクトの実施成果

① 活動実績

ア 市内小中学校における授業プログラムの実践及び実践事例集の作成

2年次となる今年度は、1年次に作成した「麦の穂プロジェクト～活動の概要と授業プログラム集～」に掲載されている授業プログラムを市内小学校9校、中学校5校の全ての小中学校で実践依頼をした。各小中学校で先生方が日常的に実践できるようにするために、本冊子を配布する際、先生方に授業プログラムを実際に体験できるような研修会を開催した。

その後、各小中学校から実践した事例を集

め、効果的な実践事例の共有化を図ることを目的として、実践事例集を作成した。

○プログラム実践事例の一例

「麦の穂プロジェクト」授業プログラム実践事例

プログラムNo.3
わかすぎ学園 那珂市立菅谷東小学校 4年
「進化じゃんけん」

実施した教科・領域 特別活動 1時間扱い

本校で実践した際のねらい ○ 男女を問わず誰とでも仲良くするために、ゲームを通して友達の良いところをみつけることができる。

【工夫・改良した点】

- クラスの仲は良く、ゲームなどみんなで楽しむことができる。しかし、休み時間は固定した友達と遊ぶことが多い。そこで、今回の進化じゃんけんでは、ゲームの前に目的を「友達の良さをみつけよう」と目的をもってゲームを実施した。
- 一度「進化じゃんけん」を行った後、友だちの良さについてみんなで話し合った。「男女関係なくできて楽しかった。」「積極的にたくさんの人に声をかけられた。」という意見が出た。
- ゲーム終了後、「今後の生活にどう活かしていくのか。」についてもノートに書き、発表した。

【効果】

- いつもおとなしい女子も大きな声を出し、積極的にじゃんけんをする相手を見つけていた。
- 固定した友だち関係ではなく誰とでもじゃんけんをする姿が見えた。
- 男女関係なく全員が夢中で参加できた。
- 今回楽しくゲームができたので、今後も男女関係なく遊んでいきたいという意見が多く出された。

【レジリエンスに関わること】

- 「友だちとかわるスキル」に焦点を当てて、体験的活動を行うプログラムを実施した。友だちの良さをみつけることで、男女関係なく誰とでも仲良くしていくことが楽しい学校生活を送れることと気づくことができた。



資料2 【小学校：第4学年の事例】

「麦の穂プロジェクト」授業プログラム実践事例

プログラム No. 12, 20
わかすぎ学園 那珂市立第四学校 9年
「この人だーれ」、「天までとどけ」

実施した教科・領域 学級活動 (1時間扱い)

本校で実践した際のねらい ○ 友達一人一人の良さを認め、自己肯定感を味わうことができる。
○ 友達とアイデアを出し合い、協力して工夫しながら活動することで、自己存在感や自己有用感を味わうことができる。

【工夫・改良した点】

- 受験期を控えた9年生に、学級内で楽しく活動しながら緊張感をほぐし、自己肯定感を高め、自己存在感や自己有用感を味わえるように、本プログラムを実施した。
- 「この人だーれ」では、自分の好きな物事だけではなく、嫌いな物事も取り上げ、生徒一人一人の人間性について、多面的に理解してもらえるようにした。
※6人1グループで2回実施
- 「天までとどけ」では、各グループに新聞紙（見開き5枚分）と、3cm程度のセロハンテープ4枚を配付し、使い方は自由とした。
※4人1グループで1回実施

【効果】

- 友達の「好き・嫌い」について考えることにより、普段はあまり話すことのない話題に触れる機会を得ることができた。また、自分の人間性について理解してもらえたことに対し、自己開示する姿も見られた。
- 制限時間内（作戦タイム：1分、作成：3分）に、各グループともリーダー的な生徒が中心となって、アイデアを出し合っていた。また、自分の役割を素早く判断し、協力し合って工夫しながら活動する姿が見られた。

【レジリエンスに関わること】

- 手軽に行える構成的グループエンカウンター（SGE）を実施し、集団における他者との共感的・協働的な関わりの中で、自己肯定感を高め、自己存在感や自己有用感を味わうことができた。また、互いの人間性を理解し合い、自己開示により「自己尊重」の精神を育むなど、アサーショントレーニングにもなったと考える。



資料3 【中学校：第3学年の事例】

イ 市教育支援センター活動の実践

○適応指導教室「ひまわり教室」における活動

今年度は、適応指導教室「ひまわり教室」では、年間を通してレジリエンスの考え方を取り入れて児童生徒支援、保護者支援、教職員啓発活動を行ってきた。

今年度の取組の様子を時系列で紹介する。

①4月6日「『たてる』1学期の目標を立てよう」

不安が生じた時には、自分で歩くべき道しるべを立ててみる。このような学習を「1学期の目標づくり」で行った。

②5月19日「『つくる』調理実習①」

つらい場面に遭遇した時には、おいしい物を自分で作って食べる、そんな「気晴らし」の方法も学んでいく。大好きな「フルーツホットケーキ作り」にOBのボランティア参加で盛り上がった。

③6月6日「『しらべる』図書館活動」

ひきこもっているのではなく、自分から外の風を感じる体験を重ねることが、打たれ強い心を育てる。支援センターから歩いて7分の市立図書館で市民に混じって自分の課題解決に向けての資料調査を行った。



【図書館活動の様子】

④6月16日「『こねる』調理実習②」

柔らかな物や手触りのよい生地が心を癒すように、ねっとりとしたクリームをこねながら、癒しの方法を体験するクレープ作りに挑

戦した。

⑤7月14日「『かきだす』文章完成法テスト」

自分の思いをきちんと表出することが、「乗り越える力」の第一歩である。昨年度のプロジェクトの予算で購入した「文章完成法テスト」を使い、自分自身を見つめ直すことができた。

⑥8月8日「『かたらう』保護者の集い」

子どもを支える親にもレジリエンスは大切である。保護者同士、同じ立場でないとは分り合えない場で語り合うことは、心の支えを得ることに繋がる。

今回は、かつて不登校を経験した成人男性のカミングアウトもあり、保護者は真剣に耳を傾けて自分ごととして参加することができた。

⑦8月18日「『やってみる』生徒指導連絡協議会」

市内の先生方を対象に授業プログラムを体験する研修会を行った。「私にはサポートしてくれる人がいる」という意識付けのための構成的グループエンカウンター演習で、参加者全員が和気あいあいと参加した。



【レジリエンスプログラム体験の様子】

⑧8月24日「『ねがう』社会科見学」

心のリフレッシュを図り、乗り越える力を養うことも折れない心作りにつながる。

校外学習の一環として茨城県と栃木県境の鷲子神社で新鮮な空気に包まれる経験を行うことができた。



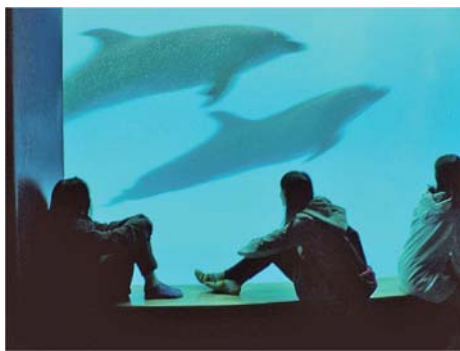
【鷲子神社で願いごと】

また、那珂川水遊園では、魚達に触れたあと、美しい色の石を削って「まが玉」と作る作業に熱中することができた。

やり遂げた記念として、透明な輝きを放つ石を手の中と心の中に残すことができた。

⑨11月22日『『ふれあう』室外体験学習会
“大洗アクアワールド見学”』

自然力に触れ合うことで、エネルギーを得る機会も大切である。大洗アクアワールドにて、海の生き物と出会ったり、海岸で潮風に吹かれたりしながら、エネルギーを充電することができた。



【大洗アクアワールドにて】

⑩12月1日『『ふれあう』ほっとステーション活動に参加』

かかわりの範囲を広げていく力、初めての相手でも交流できる力もレジリエンスである。水戸教育事務所主催の「ほっとステーション活動」に参加し、他の市町村から来た子ども

たちと仲良く、様々な活動に参加することができた。



【ほっとステーション活動に参加】

○学校支援プログラム

学校希望研修～配慮を要する児童生徒のケース検討会～

市支援センターが対応する学校希望研修には二つのパターンがある。一つは大学教員（丸山）によるケース検討会で、もう一つは、支援センターの相談員やカウンセラーによる研修会である。大学教員による検討会は平成29年度に4回実施した。一方の支援センターの相談員やカウンセラーによる研修会は、随時学校からの希望に応じてタイムリーな支援を実施できた。また、本支援プログラムは、1校が年間を通して継続的に複数回のシリーズで開催することも可能である。内容は、学校の実情に応じて、個別のケース検討会から、不登校の未然防止に関する職員研修、教育研究部の部員研修会など幅広いニーズに対応している。

② プロジェクトの達成状況

ア プロジェクトの全体運営

センターと大学側が協議を行いながら、本事業を推進することができた。

中でも、学校教育における児童生徒が抱える心理的課題、または、その背景にある学校課題が明確になり、課題解決のための具体的活動計画の策定をスムーズに行うことができた。

また、大学教員は、年間5回、実際に本

プロジェクトに参加し、活動に応じた指導助言を行った。それにより、活動全体の方向性の随時確認及び、具体的な学校支援を実行することができた。

イ 授業プログラムの成果

1年次に作成した「麦の穂プロジェクト～活動の概要と授業プログラム集～」に掲載されているレジリエンスプログラムを市内小学校9校、中学校5校の全ての小中学校での実践化を図ることができた。

また、各小中学校で実践したプログラムの事例を集め、実践事例集を作成し、小中学校へ配布した。

成果としては、隙間の時間を利用して授業プログラムを実施する学校が増えたことと、他者との関わりの中で、自己の欲求が満たされない状況での「折り合い」のつけ方を実感し、他者を認めつつ自己を表現することの大切さに関する理解を深めることができたことである。

ウ 学校支援活動

学校支援事業としては二種類の活動を実施した。一つは、大学教員が参加し、指導助言を行うケース検討会である。今年度は、小学校3校、中学校1校の合計4校にて実施した。

心理の専門家からの指導助言は、不登校児童生徒の支援に非常に有効であった。

二つ目は、学校の要請による随時型の支援活動である。個別のケース検討会を行ったり、学校を訪問したりしながらタイムリーな学校支援を行うことができた。

エ 適応指導教室（ひまわり教室）活動

那珂市教育支援センター内の適応指導教室「ひまわり教室」では、年間に10回以上の体験学習プログラムを実施した。

体験プログラムとして二種類の場で実施した。一つは、「ひまわり教室」内で実施する室内プログラムと室外に出て実施する室外プログラムである。室内プログラムでは、

絵画・工作、調理、読み聞かせ、外国語活動、クリスマス会など、季節や発達段階を考慮して内容を吟味して実施することができた。参加した児童生徒の感想からは、自己有用感や自己肯定感の向上につながる言葉が見られた。

また、室外プログラムでは、今年度は、那珂川水遊園、大洗アクアワールド、水戸市少年自然の家での活動を実施した。延べ11名の不登校の児童生徒が参加することができた。参加した児童生徒は、それぞれの活動の中で自分で選び、自分で考え行動することを通して、自立に向けた意識の向上を図ることができた。

③ 今後の計画と課題

ア 事業を実施しての課題

○大学との連携

- ①プロジェクトを推進する上で、計画的に予算を執行にすることに課題が見られた。中長期的な計画で事業に取り組むことが大切であると考え。
- ②昨年度に引き続き、学生ボランティアの活用に課題が残った。不登校児童生徒にとって、様々な人との出会いから学ぶことはとても重要である。このことから積極的に活用していきたい。

○各種プログラム実施上の課題

- ①市内の不登校児童生徒及び、その予備軍と思われる児童生徒の人数と比較すると、今年度プロジェクトに関わった児童生徒の総数はわずかである。さらに多くの児童生徒及びその保護者を支援できるようなプログラムの開発が必要と考える。
- ②今年度は、授業プログラムを実践した事例集を作成、配布した。効果的な取組を学校に周知していくとともに、気軽に手軽に実施できるプログラムとなるよう改善を加えていきたい。

イ 今後の計画

- ①次年度は3年次を迎えることになる。これまでの2年間取り組んできた授業プログラムの成果と課題を検証して、小中学校で日常的・継続的に取り組むことができるように改善を図っていく。
- ②可能な範囲で大学教員が指導助言を行い、プロジェクト全体に関する方向性と具体的な取組を見直しながら、年度途中でのプログラムの内容や方向性の適宜修正を図っていきたい。
- ③学生ボランティアの活用について、大学と教育支援センター双方のニーズとメリットを明確にした上で、さらに有効に活用していきたい。
- ④他市町村との連携
水戸教育事務所や茨城町で実施している「ほっとステーション」活動と連携を図り、共同で実施できる企画を立ち上げ、双方のよさを共有しながら、児童生徒の支援にあたりたい。